たま通信

第８１号

平成24年6月13日

医療法人いちろ会　小児クリニックたまなは　電話：８６７－００１７

「ステロイド」について一言！

時々「ステロイド」と聞くと嫌な顔をする親御さんがいます。「ステロイドでアトピーが悪くなった」という話を何度も聞かされているからだと思います。

今から 20 年前「ニュースステーション」で、当時メインキャスターの久米さんが、ステロイド軟膏を使用していた患者さんで湿疹が悪化した症例を報道した様です。それを契機に「ステロイドは怖いものだ」という風評が全国的に流れ、今までステロイド軟膏で順調に直ってきていた患者さんも突然ステロイドを止めたのです。まだ湿疹が完全には治癒していない状態でステロイド軟膏を止めると、「リバウンド」といってより悪化するのです。それでまたステロイドは恐ろしい薬だと言う事になりました。

その後は「アトピービジネス」と言って、温泉を始め、様々な商品が登場しました。我々医療関係者も一時期は「脱ステロイド」と称してさまよい始めたのです。しかし、最近では確実に薬効のあるステロイド軟膏が徐々に見直されてきました。

もし「ステロイド」が悪い薬であれば, 今ごろ医療機関では使っていないと思いませんか。「ステロイド」そのものが悪いのではなく、使い方が間違っているから症状が良くならないと思うのです。

「ステロイド」は副腎皮質ホルモンと言われ、体内で作られている生命維持に必要なホルモンですが、それを人工的に作った薬なのです。注射薬、内服薬、吸入薬、点眼薬、点耳薬そしてアトピー性皮膚炎に使われている軟膏があります。

「ステロイド」の働きは、抗炎症作用と免疫抑制作用です。炎症とは、「おでき」の様に赤くなったり、熱を持ったり、はれたり、痛くなったりする状態です。「ステロイド」は、この炎症を抑える最も強い抗炎症作用のある薬です。例えば、火事で燃え盛っている状態を、消防自動車で火消しに取り掛かるようなものです。

免疫抑制作用は、アレルギー反応を抑えるのと同時に正常な免疫反応も抑えます。「ステロイド」の注射薬や内服薬は免疫抑制作用が強いので膠原病や臓器移植の拒絶反応を抑える場合に使用されています。

しかし、ステロイド軟膏は皮膚からの吸収がほとんどないように工夫されており、抗炎症作用はあっても体全体の免疫を抑えることはほとんどない安全な薬なのです。注射薬と内服薬の全身的な副作用（感染症の誘発、消化性潰瘍、骨粗鬆症、糖尿病、白内障など）とよく誤解されています。

ステロイド軟膏の副作用も当然あります。皮膚の委縮（薄くなる）、毛細血管の拡張（赤ら顔）、ニキビ・局所の多毛、皮膚の易感染性（細菌やウィルス感染にかかり易くなる）、ごく稀に副腎皮質機能の抑制などがありますので注意は必要です。

その対策としていつまでも弱いステロイド軟膏をチビチビと長期に塗るよりも、多少強めでも短期間で湿疹を良くし、その後弱い軟膏へという使い方が良いとされています。必要な時には十分に塗り、そして定期的に受診して皮膚の状態をこまめに観察して対処していくのが大切です。

次回の「たま通信」では、アトピー性皮膚炎の最近の話題「プロアクティブ療法」について触れたいと思います。（たまなは）